ときがわ町埋蔵文化財調査報告第９集

町　内　遺　跡　Ⅷ

大福寺境内遺跡Ⅱ

― 範囲確認調査 ―

伊勢ノ台遺跡Ⅱ

― 民間開発に伴う試掘調査 ―

大福寺境内遺跡2次調査　第1トレンチ

２０１５

埼玉県比企郡
ときがわ町教育委員会

序

ときがわ町の地勢は西高東低で、山地や丘陵が大半を占めます。町名の由来である都幾川は、西から東へ町域を貫流し、西端は大字大野の大野峠付近で標高８８０ｍ、東端は都幾川河床の大字田黒貉ケ谷戸付近が標高５０ｍを計ります。その比高差は８３０ｍ余り、正にそこには山と里のが織りなす風土が形成され、人々の多様な暮らしが展開し１万年以上にの長きにわたり「郷土ときがわ」の大地に、遺跡としてその痕跡が刻まれて参りました。

さて、この度は大福寺境内遺跡と伊勢ノ台遺跡に関する調査報告を行うこととなりました。大福寺境内遺跡は、国指定史跡小倉城跡東側山麓部に所在し、今回の成果も踏まえると、かつての大福寺と小倉城跡に密接にかかわる中近世の遺跡であることが判明しつつあります。また伊勢ノ台遺跡は、狭小な平坦地が多い町内にあって都幾川左岸に形成された唯一の平坦な台地上にあり、生活拠点にふさわしい立地条件を持つことから縄文時代と奈良、平安時代の大規模な集落遺跡であることが徐々に明らかとなってきております。今回の調査報告により、ときがわ町の歴史に新たなページが書き加えられることとなりました。

本書が、文化財保護や生涯学習資料として、また考古学、歴史学、郷土史研究等の基礎資料として広く活用頂ければ幸に存じます。

最後となりましたが、調査から本書の刊行に至るまで、土地所有者はじめ地元関係各位、埼玉県立嵐山史跡の博物館、埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課に多大なる御指導、御協力を賜りましたことを厚くお礼申し上げます。

平成 27 年３月　ときがわ町教育委員会　教育長　舩戸裕行

例　言

１．本書は、埼玉県比企郡ときがわ町大字田黒字小倉ほかに所在する大福寺境内遺跡（県遺跡番№４１－０７６）の範囲確認調査、埼玉県比企郡ときがわ町大字玉川字伊勢ノ台ほかに所在する、伊勢ノ台遺跡（県遺跡番号№４１－０１９）の、試掘調査の報告書である。

２．範囲確認調査、試掘調査と整理作業は文化庁国庫補助金・県補助金・町負担金をもって、ときがわ町教育委員会が実施した。範囲確認調査、試掘調査並びに整理･報告書作成作業は、平成２６年４月２１日から平成２７年３月３１日に亘った。

３．発掘調査、整理作業と本書の編集は石川安司が行った。

４．発掘調査から本書作成に至る間に下記の方々、諸機関から御指導、御教示を賜った。銘記してお礼申しあげる。（五十音順、敬称略）
藤澤良祐、橋口定志、末木啓介、清水理史、埼玉県教育局生涯学習文化財課、埼玉県立嵐山史跡の博物館、株式会社中野技術

５．発掘調査及び整理作業員
清水理史　村田悦子　小野田照子　山﨑尚子　根岸マサ子　蓮見寛子

目　次

Ⅰ　調査に至る経過――――――――――――――――――――――――――――――　1

Ⅱ　地理的・歴史的環境と調査の概要――――――――――――――――――――――　2

Ⅲ　遺構と遺物――――――――――――――――――――――――――――――――　6

報　告　書　抄　録

フリガナ	チョウナイイセキ　ハチ							
書名	町内遺跡　Ⅷ							
副書名	大福寺境内遺跡Ⅱ・伊勢ノ台遺跡Ⅱ							
巻次	Ⅱ・Ⅱ							
シリーズ	ときがわ町埋蔵文化財調査報告							
巻次	第９集							
編著者	石川安司							
編集機関	ときがわ町教育委員会							
所在地	〒355-0396　埼玉県比企郡ときがわ町大字桃木３２							
発行日	2015年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
だいふくじけいだいいせき 大福寺境内遺跡	ときがわまちおおあざたぐろ ときがわ町大字田黒 あざおぐら 字小倉	１１３４９	０１１ （玉）	３６度 １分 ５５秒	１３９度 １７分 ５６秒	２０１４０４２１～ ２０１５０３３１	96㎡	範囲確認調査
いせのだいいせき 伊勢ノ台遺跡	ときがわまちおおあざたまがわ ときがわ町大字玉川 あざいせのだい 字伊勢ノ台	１１３４９	０１１ （玉）	３６度 ０分 ３８秒	１３９度 １８分 １８秒	２０１４０２０５～ ２０１４０２２４	175.5.0㎡	民間開発に伴う試掘調査
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
大福寺境内遺跡	集落、中近世寺院、城館跡	縄文・平安・中世	住居跡、集石	須恵器、土師器 カワラケ 中世陶器	10世紀初頭前後の須恵器、須恵器系土師質土器が町内で初めて確認された。風字硯、灰釉陶器長頸瓶、段皿片が出土しやや特殊な出土傾向にある。			
伊勢ノ台遺跡	集落跡	奈良・平安 中世	竪穴建物跡	須恵器、土師器	東西方向で主軸を同じくする、竪穴建物跡２軒が検出された。			

Ⅰ　調査に至るまでの経過

１　大福寺境内遺跡

当該遺跡は、平成２２年４月から実施された第１次調査により発見された遺跡である。調査実施の背景には山城である小倉城跡の国指定化により、山麓部での迷惑駐車が恒常的となり、駐車場とトイレ設置が地元要望として打ち出され、その候補として山麓部での駐車場設置が浮上し範囲確認調査へと至った。その範囲は、現在大福寺の境内地となっている小倉城跡山麓部直下にあたる平場とその平場法面そして更にその東側下位面の平場状緩斜面までを含んだものであった。第１次調査の目的は、①境内地東側緩斜面部での遺構有無、②境内地での遺構の有無と層位の確認、③小倉城跡同様、平場造成に伴う法面での石積み遺構構築の有無、の３点を主眼に行った。調査では、大福寺境内直下で近代、近世の大福寺に係る焼土層、土坑、人頭大で礎石状の石材等が検出され、約１ｍ前後下層ではピット状の落ち込みや中世の在地土器を伴う包含層を確認している。また同平場の法面では、天端石を長手に据え法面を石敷きとし下端に４～５石を積んだ近世の石積み遺構が検出された。更に法面石敷きを、断ち割った下層では戦国期の遺物を伴う石敷き遺構が検出されている。その東側下位緩斜面では、江戸期陶磁器と礫を含む溝跡が１条検出されている。このような、状況から東側緩斜面では、遺構が確認されたが地表から４０～５０㎝下層にあり保護層が確保できることから、造成を行わず軽く転圧をかけた上に砕石を敷いて現在は臨時駐車場として運用し、急場をしのいでいる状況である。その後、指定地外の諸課題の方向性を議論する場として、平成２４年度には町文化財保護審議委員長、地元地権者代表、地元区長、地元農業委員、地域ボランティア代表、小倉城跡調査指導委員代表からなる小倉城跡周辺整備検討委員会が発足し、５回の会議を経て平成２５年度には、ときがわ町・ときがわ町教育委員会連名による「比企城館跡群小倉城跡周辺整備方針」としてその成果がまとめられた。その中ではより具体的に駐車場とトイレ整備を平成２８年度目標として掲げている。今次報告の第２次調査は、まさに臨時運用となっている駐車場・トイレ設置に絡みその候補地を探るために実施したものである。調査地点は、１次調査の更に、東側畑地を中心に設定し、前年度の平成２６年３月に重機により表土を剥ぎ、平成２６年４月２１日より作業員を投入して開始した。

２　伊勢ノ台遺跡

当該遺跡に於いて民間開発に伴い遺跡の有無及びその取扱いについて生涯学習課窓口にて関係者が直接来庁し照会があったのは、平成２５年１１月８日のことである。その目的は、ドラッグストア建設であり、該当地はときがわ町遺跡№４１－０１９伊勢ノ台遺跡にあたっていることをその場で伝えた。遺跡内で土木工事を行う場合は発掘届が必要な事、工事計画が固まった段階で遺構の有無を確認する試掘調査が必要な事、周辺の遺跡内調査履歴から遺構が確認される可能性が高いことも併せて伝え、試掘調査については行政で行い、遺構が確認され保存措置を講ずることが出来ずやむを得ず工事を実施する場合は、現因者負担による記録保存のための発掘調査が必要な旨を伝えた。そして、数度の調整を行い、平成２６年１月２７日には試掘調査の承諾書が提出され同年２月５日より調査を実施、同年２月の雪害による中断を経て２月２４日まで調査を実施した。調査の結果、平安時代の２軒の竪穴建物跡

が検出された。なお、その後の措置として設計変更による遺構保護を講ずることが出来ない為、記録保存のための発掘調査が行われている。

Ⅱ　地理的・歴史的環境

1　地理的環境

埼玉県の地勢は、概略西に高く東に低い。比企地域はその中央にあり、県をそのまま相似形に縮小したような地形である。

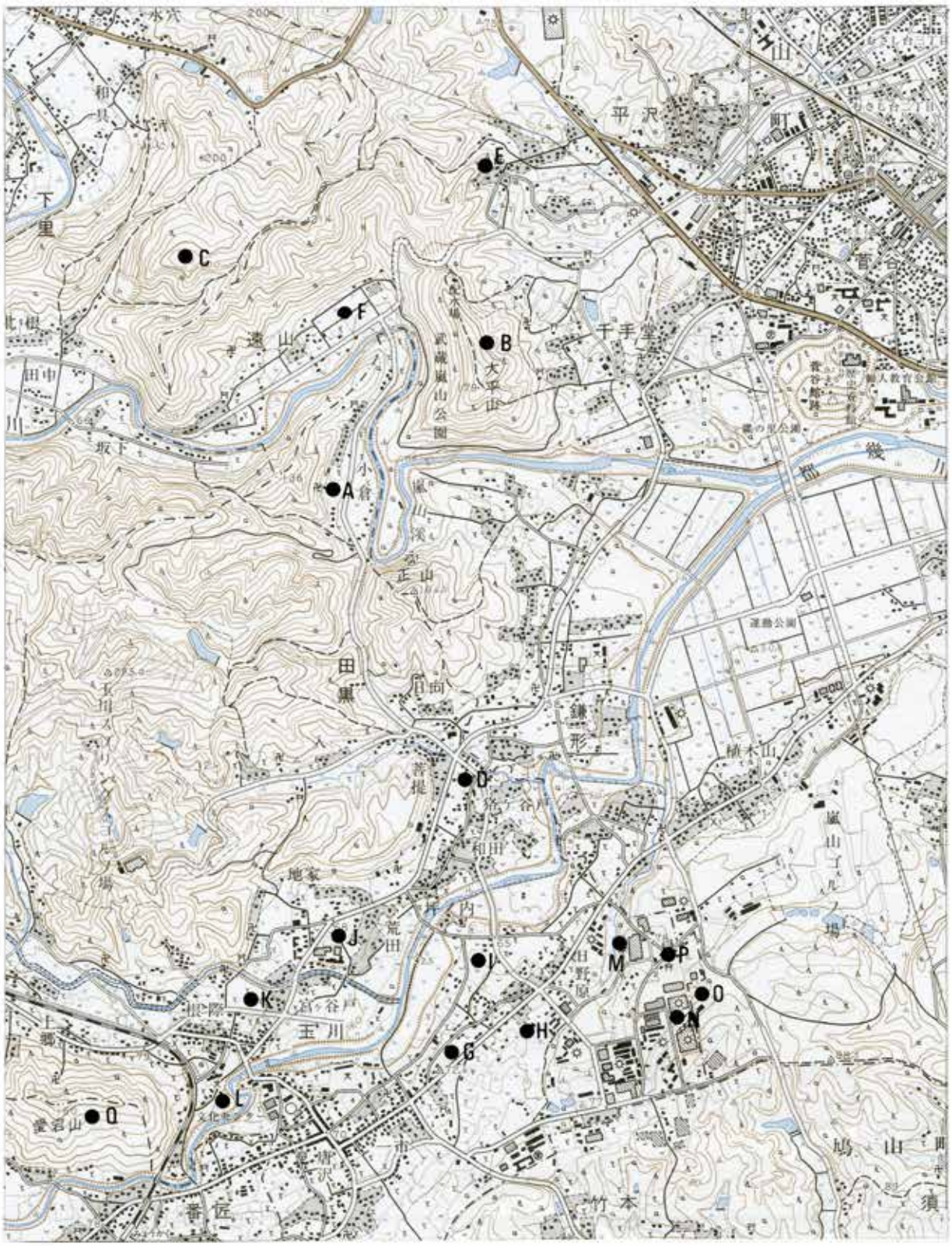
大福寺境内遺跡は、埼玉県比企郡ときがわ町大字田黒字小倉に所在し、国指定史跡小倉城跡の東山麓に位置する。当該地は、ときがわ町、嵐山町、小川町の境界付近にあって、地形的にも外秩父山地と関東平野の境界に位置する。遺跡周辺は、槻川の蛇行により形成された、谷、山地、段丘面が隘路により閉ざされた空間として存在し、自然地形を活かした天嶮の要害に立地する。この遺跡背後の小倉城跡は、標高１３７ｍをピークとする郭１とやや低い郭２を頂部に配置し、以下梯郭式に郭を形成する。当遺跡の位置する大福寺は研究者により山麓の根小屋と目された注目の場所で、その前面には大きく食い違い状に構堀の跡らしき南北に細長い区画としての水田跡が現在も確認できる。現大福寺は現況で造成された平場地形にあり、以下東へ雛段状に畑地が造成されながら比高を下げて段丘面、槻川河床へと至っている。（ときがわ町埋蔵文化財調査報告第７集『町内遺跡Ⅵ』より転載）

伊勢ノ台遺跡は、埼玉県比企郡ときがわ町大字玉川字伊勢ノ台に所在する。当該地は、都幾川中流域右岸に形成された洪積台地である玉川台地上を占地する。遺跡周辺は、標高約７２ｍ、都幾川の形成する下位から２段目の段丘面にあたり、当該地を中心に見ると東と西に埋没谷が、そして北に都幾川、南に水田が位置し、何れにも緩やかに下り傾斜となる。

2　歴史的環境

大福寺境内遺跡については、今回出土した遺物の大部分が平安時代のもので、灰釉陶器段皿片、同長頸瓶、小形の風字硯など比企地域の中ではやや特殊な出土傾向を伺わせるものがあり、ここでは奈良平安時代に絞って記述したい。

まず、触れなければならない点は、仏教関連遺跡が周辺に点在することである。槻川の対岸、北東約０．９㎞には嵐山町比丘尼山廃寺が所在する。この遺跡は、嵐山町博物誌編さんに伴い、学術調査された。立地は菅谷台地との変換点に当たる標高１７９ｍの大平山中腹を雛段造成し７箇所の平場を形成する。また山麓部の現千住院境内でも、古代瓦が出土したり須恵器が散布しており山上山下の二極構造となる可能性がある。調査では、形成された７箇所の平場の内、最高所に位置する平場にトレンチが設定され、東西９ｍ、南北６ｍの規模で柱間３ｍの２間×３間の礎石建物１棟を検出している。出土遺物には、平瓦、凹凸面にナデが顕著な丸瓦、須恵器坏、高台碗、甕、鉄釘、椀形滓がある。何れも、小片が多いが９世紀中葉～１０世紀初頭頃に収まるものである。なお山麓の千住院境内採集遺物も同様の傾向を持つが、須恵器には、底部を周辺へラ削りするものが含まれ、若干遡る資料を含む。また、平瓦には叩きに４～６㎜と７～１０㎜と２種の小形の格子叩きを持つものがあり、前者につ



第１図　周辺の遺跡　（図上が北　Ｓ＝１／２５０００）

Ａ　大福寺境内遺跡　Ｂ　比丘尼山廃寺　Ｃ　内寒沢遺跡　Ｄ　堂林遺跡　Ｅ　旧平沢寺跡　Ｆ　山根遺跡

Ｇ　伊勢ノ台遺跡　Ｈ　狐塚遺跡　Ｉ　原遺跡　Ｊ　地家遺跡　Ｋ　根際遺跡　Ｌ　破岩遺跡

Ｍ　亀ノ原窯跡群　Ｎ　日野原１号窯跡　Ｏ　将軍沢第６支群窯跡　Ｐ　飾新田遺跡　Ｑ　旧医光寺跡

いては、ときがわ町に所在する県指定史跡亀の原窯跡群からの供給が想定され、後者についてその生産地は特定できないものの比丘尼山廃寺出土と千住院境内採集の瓦資料の中では９世紀を前後する最も遡る要素をもつ。槻川を隔てた北西約１．２㎞で標高２１８ｍの山地尾根上には小川町内寒沢遺跡がある。１０箇所あまりの平場が確認され、ゴルフ場開発予定に伴う確認調査が実施された。竪穴建物跡、土坑、ピットが検出され、鉄鉢形須恵器、鉄釘、鉄製Ｕ字形鋤先、須恵器坏、碗、高台碗、皿、長頸瓶、大甕、土師器坏、土師器台付甕が出土している。産地は南比企産と末野産も胎土記述から含まれていると思う。大甕胴部破片の内面に青海波文など古い要素が見られ、確実に年代は８世紀代に遡るものが含まれつつ１０世紀前半には収束する。その他、判読不明ながら墨書土器、内面に油煙痕とおぼしきタール状物質が付着する坏、転用硯の可能性もある内面が摩耗した須恵器が出土した。立地と出土遺物の特殊な構成から仏教関連遺跡として良い。南方１．４㎞には、正山、道現平（ドウゲンビラ）の山を越え、都幾川左岸の段丘際を臨んだ地点に、ときがわ町堂林遺跡が所在する。この遺跡では調査は行われていないが、戦前玉川尋常高等小学校で教頭として教鞭をとられていた郷土史家小鷹健吾氏も紹介しており、古くから古代瓦の散布地として知られていた。かつて玉川小学校の郷土資料として保管された資料には、この遺跡採集の古瓦があり、その中に武蔵国分寺所用瓦の内、平城宮系とされる均整唐草文軒平瓦と類似する同文資料が存在する。この資料は８世紀後半～９世紀前葉に比定される。現在も現地に散布する資料の大部分が瓦であること、当地の名称が「堂林」であるなどからも、この遺跡が廃寺である可能性は排除できない。旧平沢寺跡にも触れておきたい。この寺跡は、北東約１．６㎞の位置にあり嵐山町に属する。遺跡は、１２世紀前半～中葉の遺構、遺物を伴う秩父氏や畠山氏所縁の東面する臨池式伽藍を持つ中世寺院として著名である。この遺跡の所在場所は、そもそも先の内寒沢遺跡や比丘尼山廃寺とは尾根を伝って往来できる位置関係にあり、旧平沢寺跡周辺でも須恵器の散布がある点は評価しなければならない。今のところ古代に遡る仏教関連遺物は確認されていないが、周辺の状況から推察するに、古代に開創され１２世紀段階で再興された可能性も否定しえないので、注意を払う必要がある。

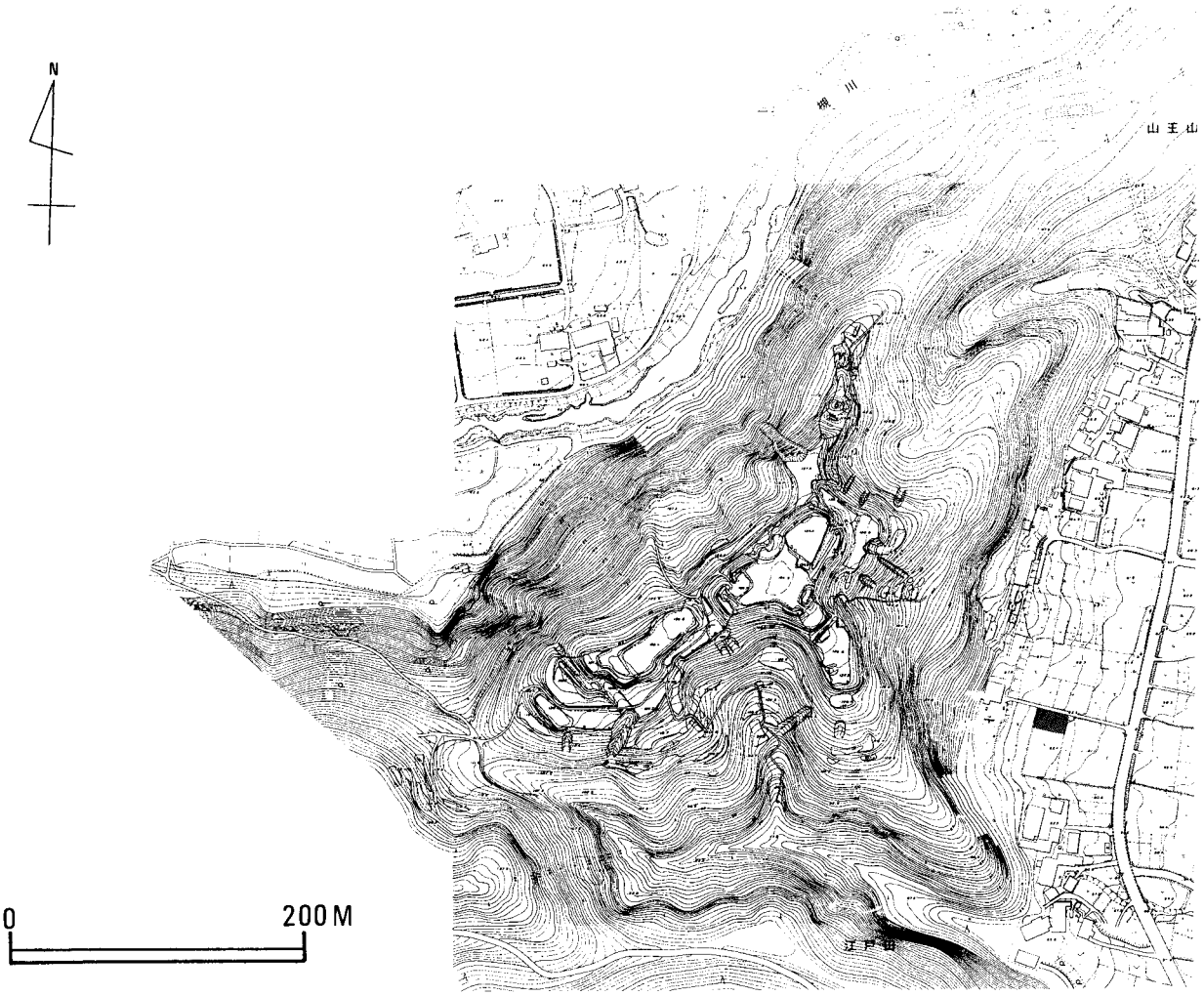
集落遺跡としては、槻川の蛇行を隔てた北０．８㎞の段丘上に山根遺跡がある。竪穴建物跡２軒が検出されており、斜格子叩きを持つ平瓦が出土している。やはり８世紀に遡る可能性がある資料であるが、そもそも須恵器・瓦の大生産地南比企窯跡群を擁するため比企地方では住居跡からの出土もままある。竈構築材としての二次または副次的な利用も予想されるし、一次供給地へ至る何らかの過程で入手される機会も他地域よりは多いことも予想できる。従って、平瓦の出土のみをもって仏教関連遺跡と断ずることは難しい訳であるが、比丘尼山廃寺や内寒沢遺跡の存在から平瓦の出土も留意しておく必要がある。このように、大福寺境内遺跡周辺には直接的又は間接的に仏教に関連した遺跡が半径１．５㎞以内に点在することが指摘でき、大福寺境内遺跡の平安期の性格を考える点で参考となる。

伊勢ノ台遺跡は縄文時代中期と奈良・平安時代を中心とする複合遺跡である。試掘調査で確認されたのは、平安時代の住居跡であるので、ここでも奈良・平安時代に絞り記述したい。

集落としては、まず都幾川右岸に伊勢ノ台遺跡とは埋没谷を隔て、ほぼ北東に隣接して狐塚遺跡が所在する。Ａ地点で、竪穴建物跡２軒、２×３間の掘立柱建物跡１棟、井戸跡１基

が検出され、須恵器坏、碗、皿、布目瓦、土師器甕、猿投産Ｋ９０号窯期の長頸瓶が出土している。須恵器坏の様相からは８世紀前半まで遡り、灰釉陶器からは９世紀中葉～後半の年代が導き出される。北へ３００ｍ、都幾川右岸の同一下位段丘に原遺跡が所在する。Ａ地点では、土坑が検出されている。奈良・平安時代の出土遺物はなかったが、土坑内に柱痕状の立ち上がりが土層で確認でき、再検討の結果、掘立柱建物跡の一部である可能性がある。Ｃ地点では、８世紀中葉の竪穴建物跡１軒が検出されている。須恵器の蓋、焼き歪みのある鉄鉢形須恵器、土師器甕が出土している。都幾川左岸では、北西０．７kmの地家遺跡で９世紀中葉の竪穴建物跡１軒。遺存状況が悪く、出土遺物も少なかった。西方１kmには、根際遺跡が所在し、２地点で竪穴建物跡２軒、２×３間の掘立柱建物跡１棟が検出されている。やはり遺存状況は悪く、出土遺物は少ない。年代的には９世紀中葉である。南西約１．１kmには破岩遺跡が所在する。都幾川に面した緩斜面に３軒の竪穴建物跡が構築されており、総体として出土遺物は少なかったが須恵器坏、碗、甕、土師器甕、灰釉陶器碗の破片が出土している。年代は９世紀である。

生産遺跡としては、南比企窯跡群北端の将軍沢第７支群にあたる県指定史跡亀ノ原窯跡群が北東約１kmの丘陵端の北西斜面に展開する。ここでは、立正大学考古学研究室及び玉川村教育委員会（現ときがわ町教育委員会）により調査が行われている。この支群は、南比企窯跡群でも９世紀代の主要生産ユニットの一つと目され、その構成要素は、現在Ａ地点に２基、Ｂ地点に７基の窖窯が確認されている。基本的に瓦陶兼業窯で、瓦としては素弁８葉蓮華文軒丸瓦と均整唐草文軒平瓦が出土し、同笵関係から国分寺市武蔵国分寺跡と熊谷市寺内廃寺跡への供給が明らかとなっている。出土した坏から見ると、底部回転糸切り後ヘラ削りを施すものが若干見られるものの、未調整のものが主体を占め、９世紀でも第二四半期を前後する時期が中心となることが伺える。そのほか、嵐山町に属する第６支群の単独窯として日野原遺跡１号窯跡がときがわ町に所在し、調査が行われている。一方、亀ノ原窯跡群が位置する丘陵斜面を登り切ると頂部には比較的平坦地が広がっている。ここには瓦陶兼業生産に携わっていた工人工房集落が確認された。この遺跡が篠新田遺跡であり、その立地は亀ノ原窯跡群と将軍沢第６支群の双方に関与する中間地点を占め、現在、竪穴建物跡１５軒、掘立柱建物跡６棟が検出され、概ね竪穴建物跡２～３軒に１棟の掘立柱建物跡がセットとなる構成をとことが分布から窺える。竪穴建物跡からは大量の須恵器、瓦を中心とする遺物が出土し床面にはロクロピットが敷設されるものも検出された。また猿投産のＫ１４号窯期の灰釉碗、Ｋ９０号窯期の灰釉長頸瓶が出土している。仏教関連遺跡としては、大福寺境内遺跡でも触れた、堂林遺跡が都幾川対岸で北１．１kmに所在する。また都幾川を遡った西約１．６kmの愛宕山南面の山腹には旧医光寺跡が所在する。埼玉県立歴史資料館（現　埼玉県立嵐山史跡の博物館）とときがわ町教育委員会により調査が実施され、所在する５段の平場の内最上段の平場で、礎石建物１棟と敷石遺構などを検出した。年代は９世紀中葉から１０世紀前葉で、出土須恵器には南比企産と末野産が混在する。また僅かに出土する瓦小破片からは、南比企窯跡群からの供給を伺わせ、軒丸瓦が亀ノ原窯跡群に見られるものと同様素弁系、丸瓦もナデのある薄造りのもので南比企窯跡群北側支群からの供給で、あえて指摘すれば亀ノ原窯跡群周辺からもたらされたものである可能性も高い。さらに西上流約６．５kmには古代段階は



第２図　大福寺境内遺跡周辺の地形図（黒塗りトレンチ位置　Ｓ＝１／５０００）

遺構的に不分明ながら旧慈光寺跡僧坊跡群が勢力として既に存在しただあろう

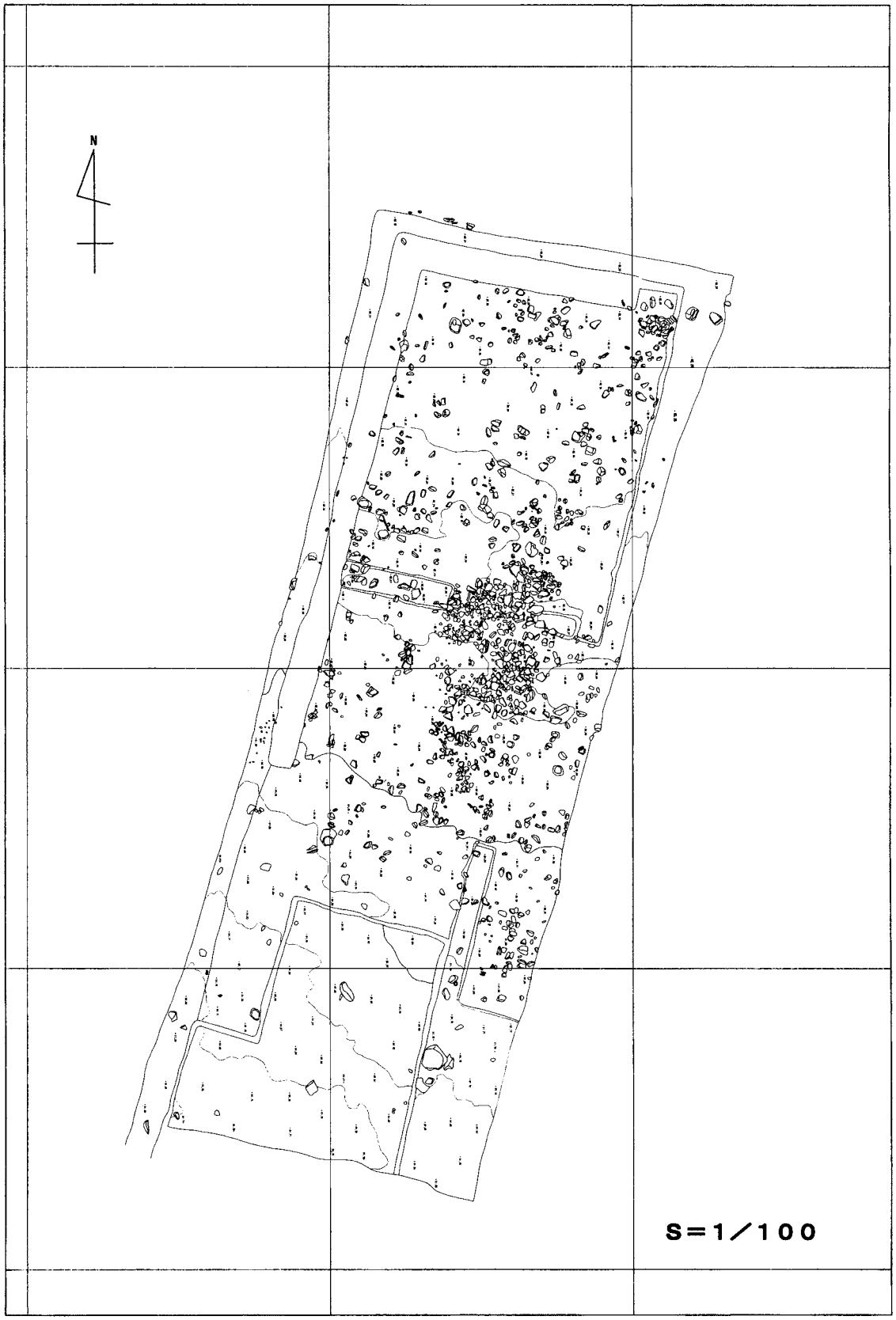
ときがわ町での歴史時代集落形成は、今のところ８世紀前半に始まる可能性が高い。それ以前は、弥生、古墳時代の遺構遺物が極めて低調なことからも頷ける。また、９世紀段階に至ると、南比企窯跡群が、丘陵北側に進出し、都幾川中上流域にも、医光寺や慈光寺など山寺の形成が明確となり、隣接する南と北の動向は町域の集落形成に大きな影響を与えたと考えてよい。

Ⅲ　遺構と遺物

１　大福寺境内遺跡

ａ　遺　構

第１トレンチは、大福寺参道に沿って東西６ｍ×南北１６ｍで約９６㎡を重機により表土を掘削し、以下人力にて掘り下げ精査した。結果、結晶片岩系とチャート系石材による集石遺構がトレンチ西側２／３の範囲で確認された。東側１／３については精査のレベルが西側



第３図　第１トレンチ

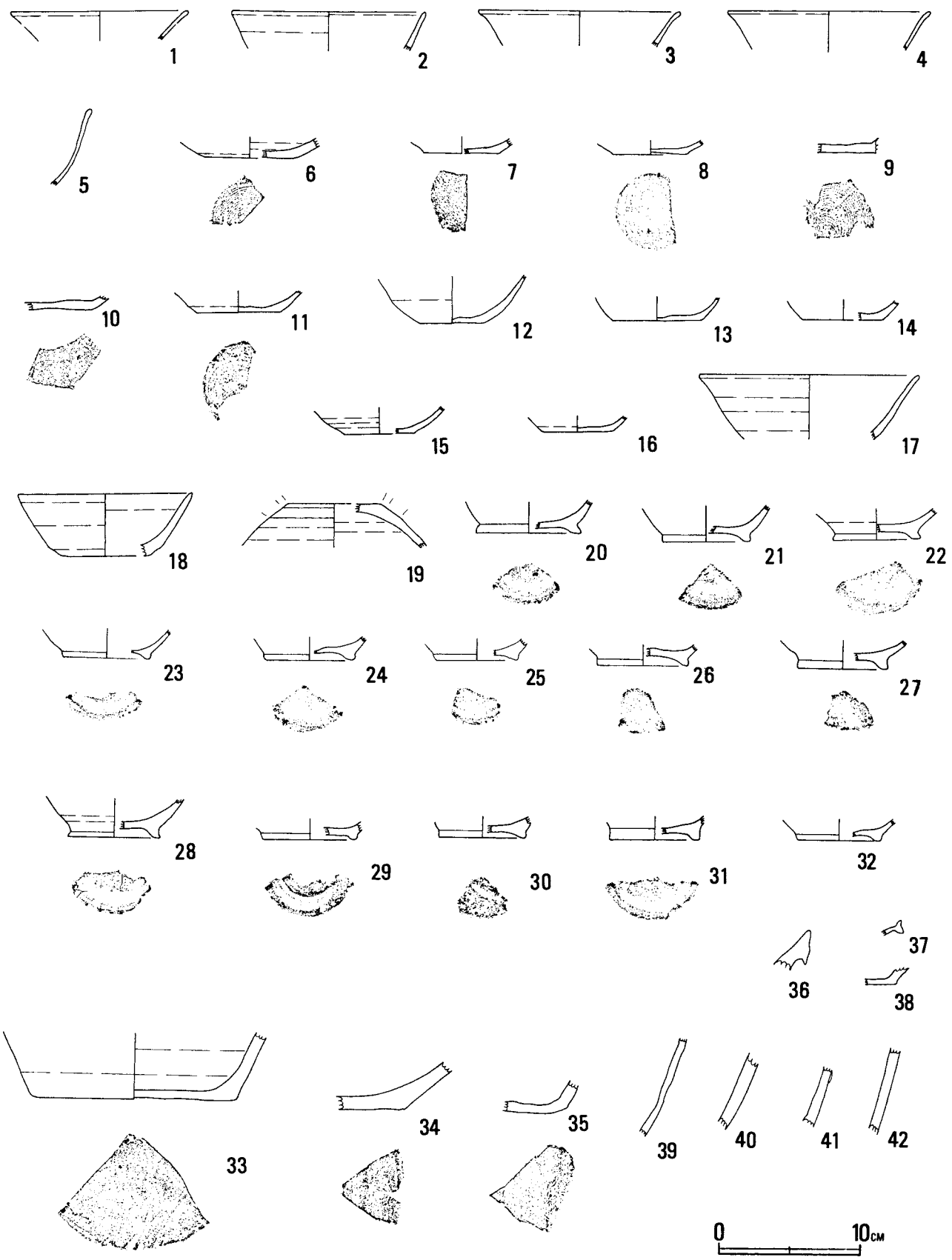
より１５cm前後高位置で止めている。これらは、小倉城跡が所在する城山側から自然営力に

より供給され集石状に見える礫群も含まれていると考えられるが、粒が５～１０㎝内外に揃い、また粗く打ち欠かかれた礫もあり明確に集石遺構が含まれていると認識できる。特にトレンチ中央付近には東西を主軸とし長軸５．８ｍ、短軸約１．８ｍの長楕円形の集石が存在した。また４０㎝前後、６０㎝前後、１００㎝以上の円形又は楕円形の集石がも複数確認できた。それらは東西方向、南北方向に部分的に並ぶように位置している。或いは、方向的に現参道に沿うように検出さることから、通路や広義の建物遺構の地形などに関わるものであろうか。遺物は、９世紀中葉から１０世紀第一四半期にかけての須恵器、須恵器系土師質土器、土師器が主体を占め、プランは不明ながら当該期の竪穴建物等が埋没している可能性が高い。集石遺構については、現段階では古代に属するものとの想定は難しく、中近世土器も少量出土していることから、中世以降の所産と考えることも可能か。

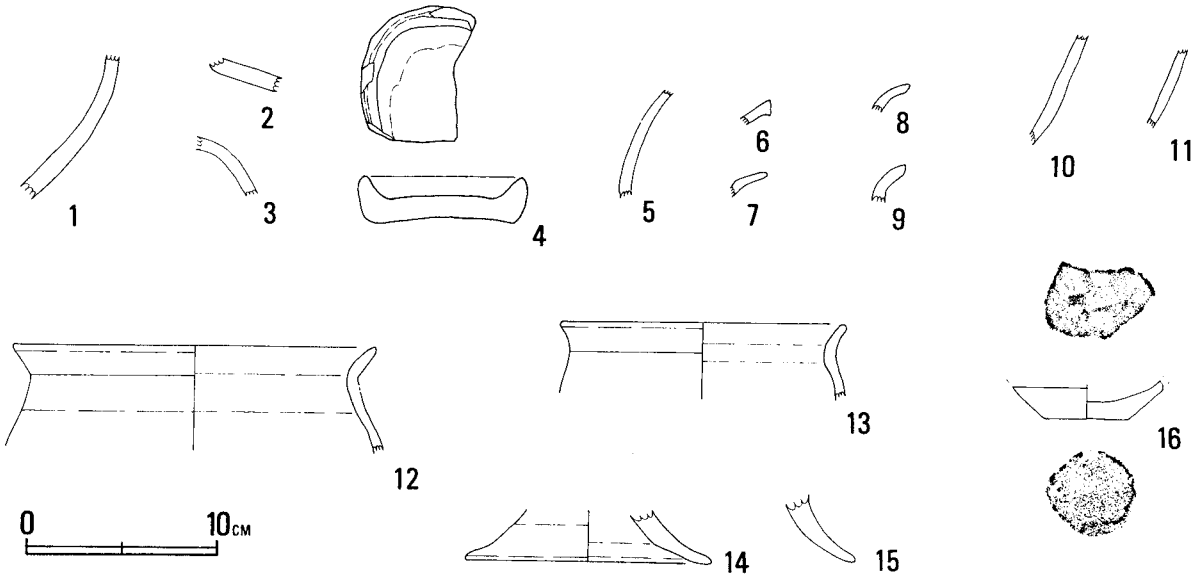
２　遺　物（第４～６図）

第４図１～４、７～１６は坏である。１、２、４は青灰色を呈し、３は橙灰色を呈する口縁部資料。何れも胎土に白色針状物質を含む。南比企産。７～１６は口縁部を欠く底部から立ち上がりを含む資料。７、１０、１５、１６は青灰色を呈し、９、１１は橙灰～茶灰色を呈する。南比企産。８は、灰白色系で短い白色針状物質微量に含む。１２、１３、１４はいずれも薄橙色を呈し器壁が脆く酸化炎系の焼成である。胎土に砂粒を多く含み、短い白色針状物質と片岩の砕粒を僅かに含む。１２、１３は底部内底面を窪ませる同巧である。６は、皿で南比企産。１８は、酸化炎焼成で胎土に白色針状物質を含む。高台の付く碗となる可能性がある。５と１７は、器高高く法量から碗としておきたい。１７については、高台が付くかもしれない。５は橙色系色調で酸化炎焼成の南比企産、１７は薄灰白色を呈し僅かに白色針状物質を含む。１９は天部にヘラ削りが施され還元炎焼成の南比企産の無紐蓋。法量的に大形の碗に伴うものである。内面は摩耗しており転用硯の可能性がある。２０～３２は高台付碗で、須恵器系土師質土器。すべて立ち上がり中位から口縁部を欠失する。２２、２７、２８、３１は末野産、２０、２１、２３、２５、２６、２９は南比企産で、他は産地不詳としておく。３３～４２は、すべて南比企産。３５～３６、３９～３８は甕、３４は平底の大甕底部片である。３６は大甕の口縁部、３７は長頸瓶の口縁部、３８は、器壁にロクロ目がみられ小形の鉢となるか。３９～４２は甕又は大甕の胴部片で４０は資料下端にヘラ削りが見られる。第５図１～３は、同一個体の破片で南比企産の長頸瓶。４は、小形の風字硯である。南比企産。５、６は灰釉陶器の長頸瓶で同一個体。７は灰釉陶器の段皿である。いずれも、Ｋ９０号窯期。８～１６は、土師器である。１２は甕の破片で口縁から頸部付近にかけて「く」の字状を呈する。器壁は既にやや厚くなっている。８、９は甕口縁部の細片で器壁がやや厚くなる。１０、１１は甕胴部の破片、１４、１５は台付甕の脚部である。

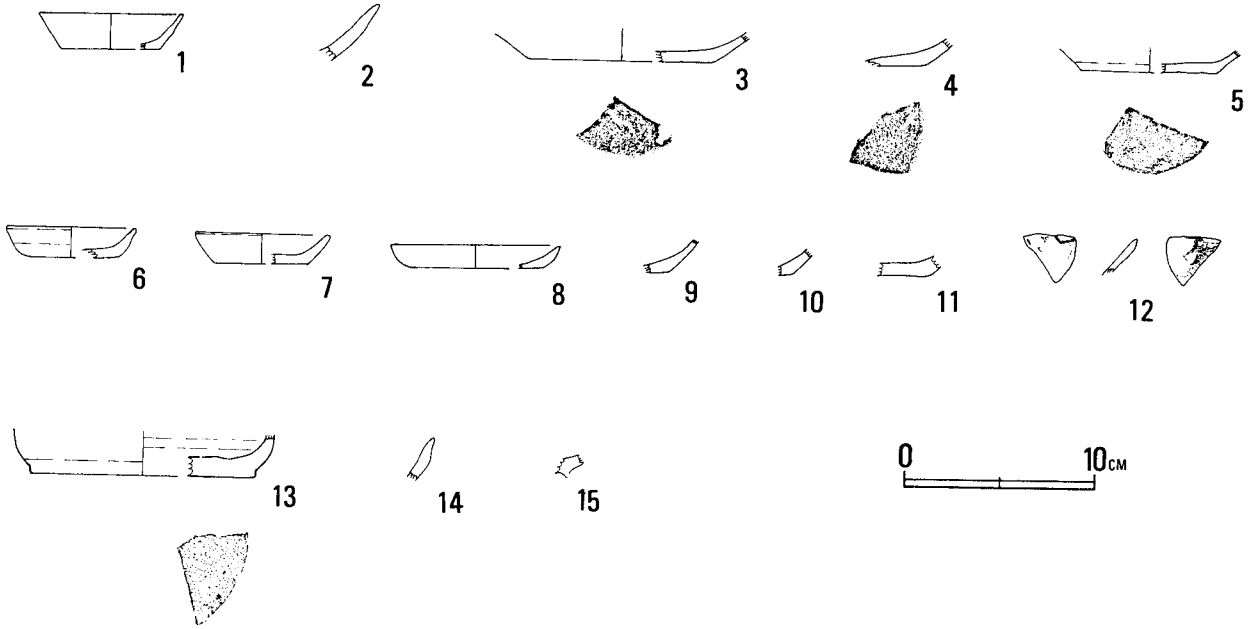
第６図は中世の資料で７～１２はカワラケである。２～４は復元ではあるが口径１５㎝前後となる大ぶりのものである。３は、鍋や内耳など在地土器に近い焼成である。１３～１５は瀬戸美濃製品である。１３は、大窯期の匣鉢である。内底面と外面立ち上がりに鉄釉が垂れた痕跡があり中上位には鉄釉が掛けられていた。１４は天目茶碗で大窯３期、１５は端反


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
36
37
38
33
34
35
39
40
41
42
0
10cm

第４図　出土遺物　1



第５図　出土遺物　２

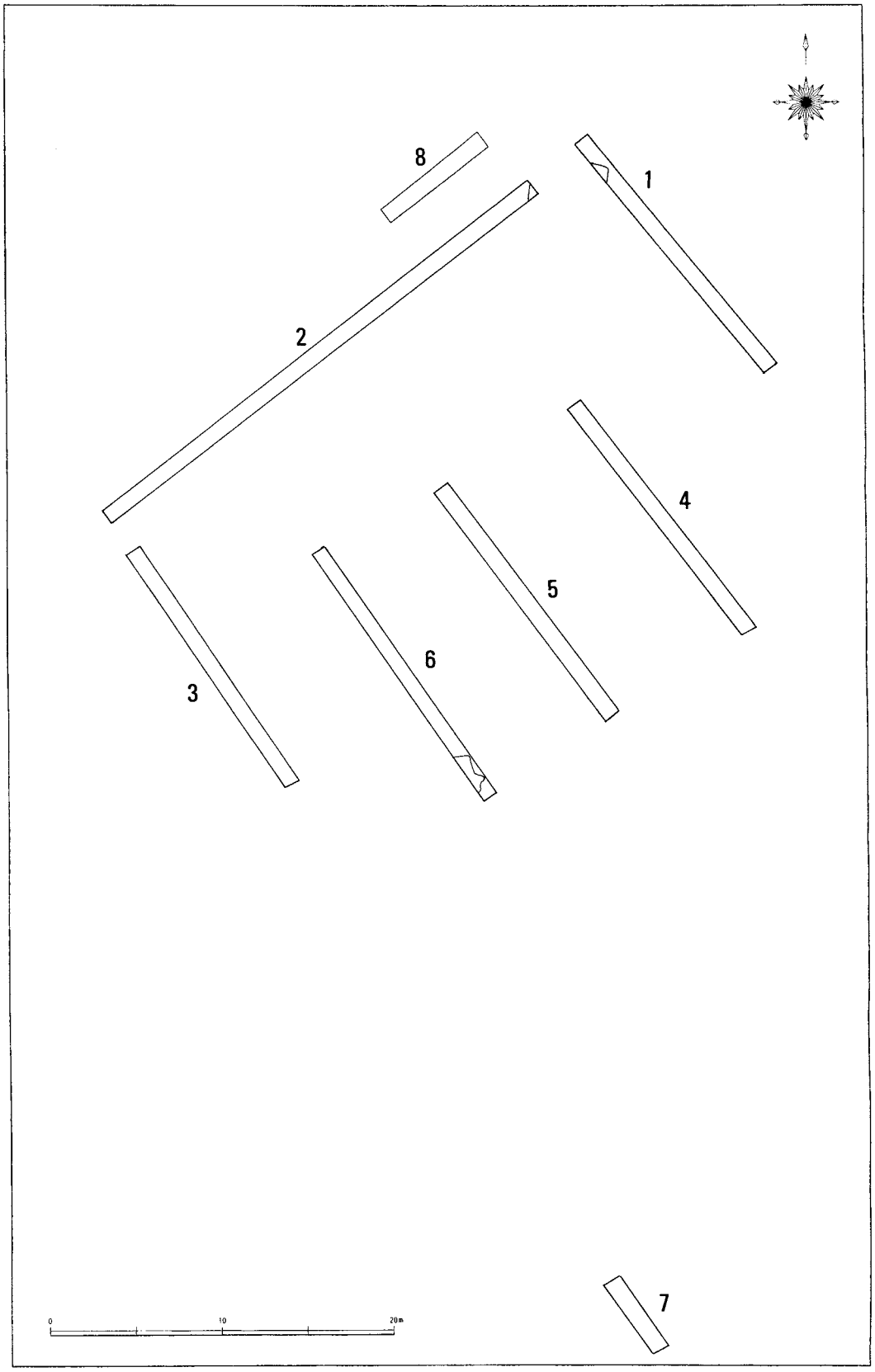


第６図　出土遺物　３

皿か丸皿で大窯１又は２期と考えられる。

１　伊勢ノ台遺跡

試掘調査のトレンチは、予定された建物の壁立ち部分と内部の柱部分、そして浄化槽、燃料タンクに伴う掘削の及ぶ範囲に対し８本設定した。結果、１から２トレンチにかけて１軒、６トレンチで１軒、合計２軒の主軸を東西方向とする平安時代竪穴建物と６トレンチで土坑、ピットが検出された。



第７図　伊勢ノ台遺跡Ｈ地点　トレンチ配置図及び確認遺構

図版　1

大福寺境内遺跡　重機稼働状況

伊勢ノ台遺跡Ｈ地点試掘調査重機稼働状況

大福寺境内遺跡作業風景

伊勢ノ台遺跡Ｈ地点２トレンチ遺構検出状況

大福寺境内遺跡　集石遺構検出状況

伊勢ノ台遺跡Ｈ地点６トレンチ遺構検出状況

大福寺境内遺跡出土須恵器、須恵器系土師質土器

大福寺境内遺跡出土須恵器甕

大福寺境内遺跡出土須恵器系土師質土器、須恵器

大福寺境内遺跡出土須恵器甕、風字硯、土師器

図版　３

大福寺境内遺跡出土
カワラケ、
瀬戸美濃施釉陶器（中世）

大福寺境内遺跡出土
灰釉陶器（古代）
長頸瓶、段皿

大福寺境内遺跡２次調査　第１トレンチ集石遺構

ときがわ町埋蔵文化財調査報告 第９集

町　内　遺　跡　Ⅷ

大福寺境内遺跡Ⅱ

― 範囲確認調査 ―

伊勢ノ台遺跡Ⅱ

― 民間開発に伴う試掘調査 ―

２０１５年3月３１日

編集・発行　ときがわ町教育委員会
印　　刷　たつみ印刷株式会社